

白鳥事件について

戊辰戦争のおり、隣町の亘理に進駐していた官軍は阿武隈川を渡ってきて、大沼（現在の自衛隊のいる場所）に飛来していた白鳥狩をしました。白鳥はこの周辺では神の使いとして崇められているので止めるように住民が懇願しましたが聞き入れられず、何度か繰り返されえたとき、悲劇が起きました。柴田家中の人が水路で漁をしていたときに、白鳥を撃つ銃声を聞き、たまたま二人が官軍のあとを追い、阿武隈川を帰る兵隊に向かって鉄砲を撃ってしまいました。新式銃の官軍に比べ、旧式の鉄砲しかなかったためか兵隊まで届かず、船の舷側に当たりました。しかし、この事件は仙台にいた官軍の参謀府まで連絡されました。仙台藩と柴田家では鉄砲を撃った兩名を捕縛し、仙台まで護送しましたが途中で森玉造と言う人が逃亡してしまいました。官軍の参謀府はこれを怒り、三日以内に逃亡した森を捉えよ、そうでないと責任は柴田家当主の柴田意広（もとひろ）だけでなく、太守・伊達慶邦にも及ぶと告げられました。柴田意広はこの年の春に37歳で当主になったばかりで、秋田への出陣から仙台に戻ったところでした。三日間の捜索にも関わらず森は見つからず、やむなく意広は責任を取って割腹してしまいました。また、囚われていた鉄砲を撃った小松亀之進も斬首されました。

しかし、事件はこれで終わらず、参謀府は執拗に逃げた森の捕縛を要求しました。やむなく、柴田家では玉蔵の義兄・森文治を身代わりに差し出すことに決めました。文治も「止むなし」という覚悟で首を切られ、一応事件は決着しました。官軍に向かって打たれた1発の弾丸が3人の命を奪う悲劇を生むことになりました。これが柴田町の白鳥事件です。